

<視覚・聴覚・言語障害教育>

主体的に取り組み楽しく表現できる音楽活動の指導の工夫

—点字楽譜導入期における授業実践を通して—

沖縄県立沖縄盲学校教諭 宮 城 やよい

I テーマ設定の理由

特別支援学校学習指導要領では、障害のある幼児・児童・生徒に対し、生きる力を育むための基礎的・基本的な知識・技能の習得が重要であるとしている。また、小学校音楽科では「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」と教科の目標を示している。特に楽譜に関する記述でいえば、楽譜に関する基礎的な知識を理解し音楽活動に活かす力を身につけることが、リズム感・旋律感・和声感・強弱感・速度感・音色感を感じ取る能力を育む力の基本となり、音楽の様々な特性に対する感受性を高めると共に「美しいものや崇高なものに感動する心を育てるのに欠かせないもの」「豊かな心を育む基盤となる」とされ、音楽科の活動に於ける読譜理解の重要性を解説している。

沖縄県立沖縄盲学校は、幼稚部から高等部普通科及び専攻科を含め全校幼児・児童・生徒64名が在籍する県内唯一の視覚障害教育を行う学校である。専攻科の職業課程の他に、生徒の能力及び障害の状態や特性に応じて、「準じた教育による指導」「知的障害特別支援学校の各教科との代替による指導」及び「自立活動を中心とした指導」の3つの教育課程により編成されている。また、音楽の授業における生徒の特徴として、色々な音の中から特定の音を聴き分けたり一度聴いた曲を暗唱できる生徒が多く、これらの能力において生活年齢や発達年齢以上の能力のある生徒が多い。

対象児（以下本児とする。）は小学5年生になる全盲児で右手足に軽い麻痺が見られる。準じた教育課程に属しており、教科によっては下学年適用である。また音楽に興味・関心が高く、豊かな感性を持ち、意欲的な態度で授業に臨む児童である。校内音楽発表会では鍵盤楽器を演奏し二重唱を発表するなど音楽を心から楽しみたいという強い意欲が感じられた。このように歌唱や器楽演奏において自分の持てる力を発揮しようとする児童だが、楽譜についての知識がなく階名の確認は教師による範唱や口伝えによって行われているのが現状である。本児が小学部高学年になり様々な音楽に触れる機会が増える中で、楽譜の知識について理解し表現方法を身につけることができれば、より主体的に音楽活動に関わることができるようになるのではないかと考えた。ここでいう主体性とは、音符や楽譜に関する記号を理解し自ら音楽的表現につなげようと思ったり、工夫して表現しようとする行為を指し、これらの行為が読譜から表現へ移行する過程で「考える力」を育て、よりよい表現へと「思索」を深める機会となると考える。しかし、点字楽譜は視覚障害者の中でも一般的に理解されておらず指導者も少ないのが現状で、本校においても導入期における指導実践事例や資料が希少である。

そこで、本研究を通して導入期における点字楽譜の指導方法や内容、教材・教具について研究を深め、本児に楽譜の読み方と音楽的表現への関係性について理解を図ることができれば、音楽活動に主体的に取り組むことができるようになるのではないかと、さらに生活の中でも自ら音楽を楽しもうとする態度につながるのではないかと考えて本題材を設定した。

<研究仮説>

音楽活動の領域において、点字楽譜を習得し音楽による表現方法を理解することができれば、自力で学習することが可能となり、歌唱や器楽演奏などの音楽活動に主体的に取り組めるようになるであろう。

II 研究内容

1 視覚障害に関わる研究

(1) 視覚障害とは

視覚障害とは、先天的または後天的な原因により視機能に何らかの障害が発生し、治療による回復が困難で日常生活に不自由を来すことを指す。視覚障害教育の対象となる生徒は「両眼の矯正視力が概ね0.3未満の者または視機能障害が高度のものうち、拡大鏡等の使用によっても通常の図形や文字認識が不可能または著しく困難な者」とあり、盲者と弱視者に大別できる。また、視覚障害の特性として、①周囲の状況や模倣等の環境把握が難しい②事物の理解を視覚以外の感覚に依存するため概念形成が難しい③単独での移動が難しいなどの困難さが生じるとされている。

(2) 視覚障害教育の指導について

鳥山は障害児に対する教科の専門性について、教科の指導内容に関わる専門性と障害の理解と配慮に対する専門性があり、学習指導要領の各教科の目標に即して教科の指導内容の本質を踏まえることが大切であるとしている。視覚障害児の特性を考慮した授業計画では、児童生徒を活動の中心に見据え自分でやれる体験を通して全体像の理解につなげられるもの、能動的探索ができるなど十分な時間が保障されるもの、基礎的で汎用性の高い基本操作などを含めた系統的技術を習得できる内容であること、教材の核となる内容に時間をかけ少ない作業をじっくり遂行し確実なイメージや知識が得られるよう指導内容の精選が重要である。また、視覚障害児の特性を考慮した授業実践では、教材の置き場所や形状、大きさなどの空間的な全体像の把握、活動の手順や見通しを持たせるなど時間的全体像の把握、最後まで活動したり能動的探索を行うための時間の保障や教師の言葉によるフィードバック、聴覚や触覚を活用した教材の工夫や精選などがあげられる。

2 点字楽譜に関わる研究

点字楽譜について

点字は縦3列横2列の6点の凸字の組み合わせにより1マスが構成されている(図1)。墨字(晴眼者が使用する文字や記号等紙媒体にかかれた情報)で使用される文字や記号には点訳できないものはないと言われるほど、点字の文化は豊かであると言われている。数字やアルファベット、その他の記号等も6点で表記されるが、仮名表記による点字と区別するため前置符号を用いて記号の特性を示した後で、仮名文字を読み替えた記号が表記される(図2)。広く一般的に使用される五線譜は、五線譜上に描かれた音符の上下によって音の高低を表すなど図的な表記であるが、点字楽譜は五線譜をそのまま点字や凸字によって浮かび上がらせたものではなく、6点点字によって表記される文字譜である(図3)。通常使用される点字は6点の組み合わせで一文字を成すが、点字楽譜表記法による音符は、①②④⑤の上4つの点で音の高さを示し(図4)、③⑥の下2つの点で音の長さを表す(図5)。このように1文字で、音符の長さや音の高さなどの2つの意味を持つ表記は点字楽譜特有であり、初期学習においては丁寧な指導が求められる。

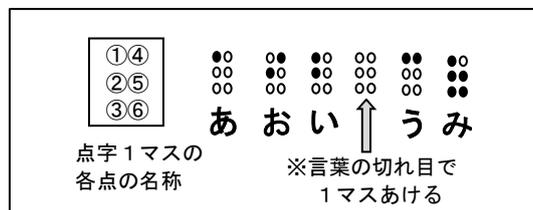


図1 点字の構成と仮名文字の例

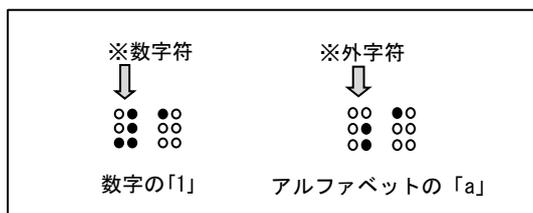


図2 前置符の例



図3 点字楽譜の表記例

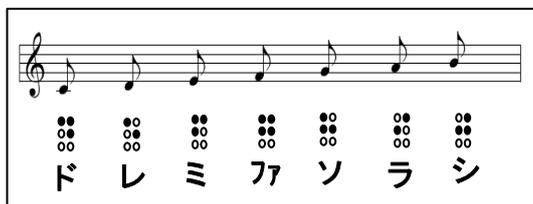


図4 五線譜表と点字表記例

III 研究の実際

1 点字楽譜の指導について

(1) 点字楽譜の指導について

晴眼者が一般的に使用する五線譜は図的な表記によるもので、音符の密度や旋律の流れや強弱などが視覚

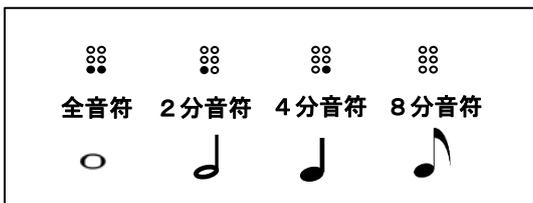


図5 音符の種類と点字表記

的に捉えられるようになっており、一見して楽曲の概要が把握できるようになっている。また、五線譜は音符を5本の線上や線と線の間に描き、上下させることで音の高低を示し、音符の形状の違いによって長さを示している。音符の形状と音の長さのマッチングが理解できれば、音の高さに関しては同様に読譜することができる。

これに対し、点字楽譜は文字譜である。五線譜に表記された音符や記号等の情報を分解してその音符に対応した点字を1文字ずつ規則的に表記させ、人差し指で左から右へと触読し情報を入手していくため、全体像が捉えにくい。さらに、前述したように音符は6点から成る点字を①②④⑤の点と③⑥の点とに分解されている。点字楽譜を指導する際、通常8分音符による階名指導を最初に導入する方が他の音符へ移行しやすいと考えられる。なぜなら8分音符の階名に3の点を付けると2分音符、6の点を付けると4分音符、3と6の点を付けると全音符となるので6つの点の合成分解が可能な場合はこの手法が合理的といえる。しかし、初期学習の時期において、特に児童の発達段階によっては、このように合成や分解を前提とした指導は有効な手立てとは言い難い。理由は、文章を読み書きし活用できるようになった点字を上4つの点と下2つの点とで分解して覚える指導は、文字を獲得する導入期における学習方法と異なるため、影響が大きいと考えるからである。また、導入期において使用される音符は、8分音符より4分音符の使用が一般的であり出題頻度が高い。よって、本研究においては8分音符から他の音符へ移行するのではなく、4分音符を主とした仮名表記による点字を音符として読み替えていきながら、常にその音符の名前や長さ・高さなどの理解を図る指導、そして音符を音として表現し概念を一致させるなどに重点をおいた系統的な指導へ展開していきたいと考えている。

具体的には、基本となる4分音符と4分休符のリズム譜の読み方と表現について学習し、4分音符による「ドレ」の階名を1～2個ずつ導入する。次に課題となる音符を用いた譜例を読譜することで学習の定着を図り、徐々に2分音符や8分音符、全音符など様々な種類の音符や休符を使って、音域を広げたり、段階に応じて記号を取り入れたりしながら読譜能力を高めていきたい。ここで留意することは、音符は仮名表記の読み替えになるので、楽譜として読むことを意識させるために、仮名表記で「す」と読む文字を楽譜では「4分音符のド」同様に「さ」を「四分音符のレ」というように一つひとつの文字を音符として読みかえて教師と共に確認する作業を行うこと（図6）、リズム譜では「タン」「ウン」など言葉を発しながらリズム打ちをしてイメージを持たせること、最後に教師と一緒に歌ったりピアノで弾いたりして実際の音や旋律の流れとしてフィードバックできるようにし、表現する楽しさを常に感じられるよう授業を展開することが重要であると考えられる。

(2) 点字楽譜を学ぶためのレディネスについて

楽譜を学ぶ際に必要なレディネスとして6つの要素があると考えられる(表1)。①については、歌や器楽、鑑賞による音楽経験だけでなく、リトミックや手遊び歌などの身体表現を通して音楽を体感できると、音符を実際の音として表現する際にリズムや旋律の流れのイメージをより捉えやすくなる考えられる。②については、楽曲の特徴を捉えて表現するために拍を感じて1拍目を意識してリズム打ちをしたり、教師が拍を数えながらリズム打ちをする、または、メトロノームに合わせてリズム打ちをするなどの工夫を行う。③については、基本となる4分音符と4分休符による平易な楽譜をしっかりと声に出して歌うことから始め、次第に2分音符や8分音符へと音符の種類を広げて練習する。実際にリズムをタン、ウンなどの言葉と共に表現することで

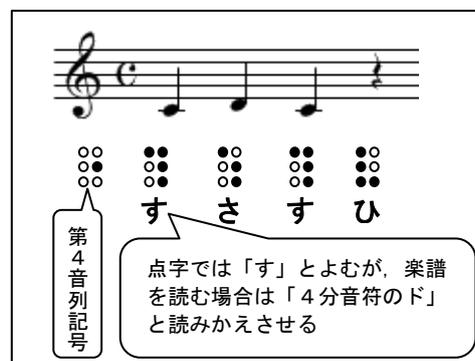


図6 点字楽譜の読み替え

表1 点字楽譜を学ぶためのレディネス

点字楽譜を学ぶためのレディネス

- ①音楽が好きで歌ったり表現することが楽しいと感じられること
- ②歌やリズム打ちが音程感や拍を感じて表現できること
- ③節奏を聴いて、階名唱やリズム打ちを声に出して表現できること
- ④10程度の数の合成分解ができること
- ⑤点字による学習が可能で、数符などの読み替えができること
- ⑥机上で学習する際に前後・左右・上下などの概念が形成されていること

読譜への導入が容易になる。これらのことをゲーム感覚でテンポよく行うことで楽しさを引き出すことにも留意したい。また、導入期においては、全音符や休符の「間」をどの程度とれば良いかということについて理解できていない場面があるので、全音符の読み方を「ターアーアー」、全休符を「ウンウンウン」と言葉にして拍を確実に感じさせたい。④については楽譜の表記上、タイでつながった音符や付点音符の拍数を数えたり、休符を数えたりする際に数の概念が必要となる。⑤については、点字楽譜は通常使用する仮名表記による文字の読み替えであるから、数符などの読み替えができなければ学習には向かないので必須条件となる。最後の⑥の空間概念について、視覚障害者の空間における「上下前後左右」と机上における「上下前後左右」とでは、言葉との一致ができていのかどうか重要である。机上で学習する際は「手前」が「下」で「向こう側」が「上」となり、ある文字を起点としてその文字の「左側」が「前」で「右側」は「後」となるなど、3次元における空間認知と2次元とで言葉と指し示す箇所の違いについて把握できていることが大切である。

2 教師が点字楽譜を学ぶ方法について

点字楽譜は五線譜と点字の知識を要するため、晴眼者や視覚障害者においても一般的に周知されているとはいえない。そのため情報が限定されており、教師自身が習得することに課題がある。本研究では、教師が点字楽譜の知識を身につけるためにはどのような方法があるか、また、教材作成において参考となる書籍等をまとめた(表2)。

表2 点字楽譜の様々な学習の方法

名 称	著 者 者	発 行 者
点府楽譜の手引き	文科省	日本ライトハウス
楽譜点訳の基本と応用	川村智子	石井昭男
世界点字楽譜解説	川村篤次郎訳 林 繁男編	財団法人 日本文化財団
初歩の点字楽譜	小住紀子	藤沢市楽譜 点訳グループ
点字楽譜学習作成ソフト 「ビースコア ver. 3.01」	情報処理振興事業協会 株式会社マイクロシーエーデー	
音楽点訳通信教育	社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター	
点字楽譜翻訳サーバ	横浜国立大学大学院 環境情報研究院 後藤研究室	

(1) パソコンを使った教材作成について

点字楽譜の教材を作成する場合、点字器や点字タイプライターによる作成は可能であるが、点字の打点ミスが何度も修正できないことや複数枚制作する際に時間や手間を要する。そこで、パソコンを使った教材作成について紹介する。

① 楽譜点訳ソフト「B' score (ビースコア)」を使った教材作成

教材は、点字楽譜作成ソフト「ビースコア」

(Micro CAD Co., Ltd. IPA) により作成することができる(図7)。作成したい楽譜をマウスやキーボードにより入力し、五線譜の下に表記された点字を確認したあと BSE 形式で保存し点字印刷する。平易な楽譜なら容易に作成できるが点字楽譜のレイアウトに注意して作成する必要がある。また、印刷は生徒用と教師用の点字資料も合わせて印刷しておくが良い。印刷機の状態によっては、点字の形状が粗い場合や点字の突起が十分でないことがあり、生徒の触読がスムーズに行えているか確認するのに必要となるからである。このようにパソコンを使うことで教材作成やデータの保管ができ、生徒の能力にあった教材が容易に提供できる。

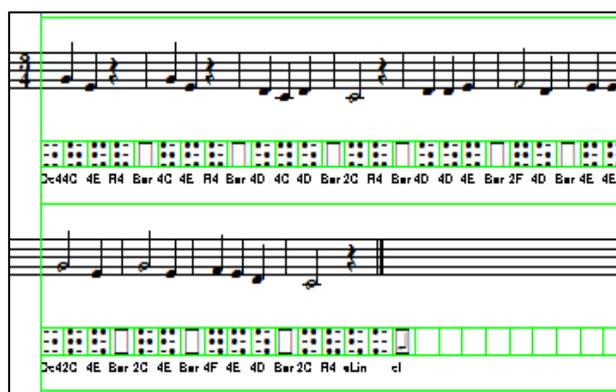


図7 ビースコアで作成した「かつこう」の点字楽譜

② インターネットを活用した「点字楽譜自動翻訳システム」の活用

横浜国立大学大学院環境情報研究院の後藤研究室により、研究が進められている「点字楽譜自動翻訳システム」のウェブページは、点字楽譜の作成に有効である。このシステムはXML形式で保存された電子音楽ファイルを、インターネットを介して点字に変換する自動翻訳システムである。PC環境として点字フォントやXML形式に保存できる電子音楽ソフトがあることが望ましい。このシステムは、五線譜に記載されている情報を効率的に点訳できるので授業で使用する楽譜を

作成する際に活用することも多い。以上のように様々な点字ソフトを紹介したが、どのソフトも補助的手段であるため、レイアウトや表記については確認して使用することに留意したい。

3 教材・教具について

視覚障害者にとって教材・教具は、触察により全体像を把握するなどの概念形成を図るために使用したり、操作することで思考を深める手段として使われる。安定して操作ができるようマットなどを敷いて固定し丁寧に触察や操作ができるよう、また時間に余裕をもたせることが大切である。

(1) 教材「初歩の点字楽譜」

本研究で使用する教材「初歩の点字楽譜」は、藤沢市の楽譜点訳ボランティアグループにより作成された点字楽譜導入のためのテキストである。このテキストには点字用と墨字用があり、全く楽譜がわからない初心者でも容易に導入できるように構成されている。言葉あそびと平易なリズムを合致させた内容から始まっているが、これらは小学生の音楽の教科書でも使用されている手法で、言葉のリズムと楽譜としてのリズム譜とを結びつけながら楽譜へと導いている。音符も4分音符を基本として2分音符や8分音符や休符の表記の仕方や読み方などの学習へと広がっており、階名も1～2個ずつと徐々に増やしていく手法である。各單元ごとにドリルが提示されているため習熟の度合いを確認できる内容となっている。

(2) 点字楽譜導入のための自作教材

点字楽譜で使用される音楽記号及び基本となる音符や休符の読み替えについて解説し、児童が読んで理解しやすいよう平易な譜例や楽譜の階名による読み方などを記載した(図8)。片面印刷で30頁程度の内容となっており、点字楽譜を指導する教師が活用しやすいよう、また小学4～5年生の児童が一人でも点字楽譜について平易な楽譜が読譜できるように内容をめざし作成した。

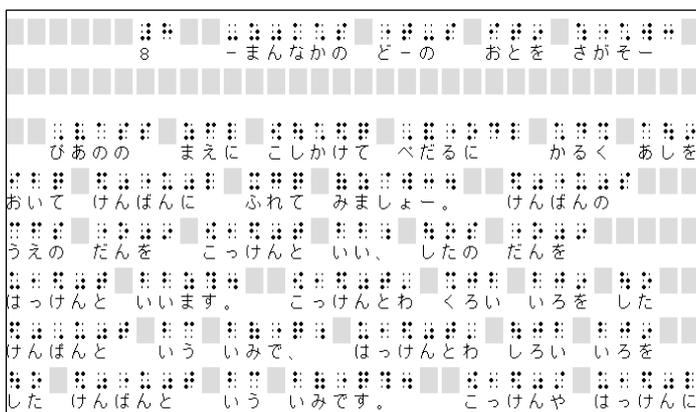


図8 点字楽譜導入のための自作教材

(3) 音符カード

リズム譜を学習する教材として、丸子あかね監修による「みんなだいすき！リズムカード」(株式会社学研パブリッシング)の音符カードを全盲児が触れてわかるように改良した(図9)。拍子毎に台紙を変え、1小節を「おうち」に見立てて小節内の拍数を明示する。工夫した点として、透明なタグペーパーで作成した点字表記による音符を各カードに添付し、音符の種類が識別できるようにしたことや、小節線を1cm幅のフェルトで仕切り1拍毎の仕切りを5mm幅のフェルトで仕切るなど拍による音価の変化が把握できるようにした。また、カードを4cm×2.5cmに縮小し、点字も左から右に直線でたどれるよう添付位置に配慮した。カードを取り替える際に、安定性を図るためにホワイトボードの台の裏に滑り止めを付け、カードの裏面にマグネットを付けるなど工夫した。



図9 音符カード

(4) 音符マグネット

五線譜で使用される音符や休符をマグネットシートで作り、ホワイトボード上で再現できるように作成した教材である。一般的に使用されている五線譜の概要を理解することで、楽譜の形状や読譜方法について点字使用者との情報の共有を図ることをねらいとしている。また、点字楽譜導入期の段階では、様々な音符について理解を促すために、五線譜で使用される音符の形状と点字と比較することで音符に対する概念形成を図ることを目的とする。

4 対象児の実態について

(1) 身体的状況及び点字に関する実態について

対象児は小学部5年生である。点字に関する状況では、かな文字の触読スピードが1分間に160文字となっている。点字触読能力が1分間に150字以上の速さであれば、触読による学習が可能であるとされている。また、点字楽譜は前置記号による読み替えが重要な要素となるため、かな文字

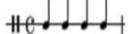
以外に数字やアルファベットなどの読み替えによる学習等ができていのかどうか、学習を始めるうえで重要な要素となる。対象児はアルファベットの学習は未経験だが、数字の読み替えがスムーズで習熟できていることや一定の触読にスピードがあり、新しい分野の学習でも点字による学習が備わっていると考えられる。

項目	項目に対する生徒の状態
身体的な状況	<ul style="list-style-type: none"> ・左右視力測定不能 ・背筋を伸ばした姿勢を保つことが難しく、身体を前後に揺らしたりうつむくことが多い ・右手足に軽い麻痺があるため身体の動きにもぎこちなさがあるが、体を動かすのが大好きで意欲的に取り組む ・明朗快活、好奇心旺盛で新しい学習に対する意欲が高い
点字に関する状況	<ul style="list-style-type: none"> ・点字を使用しており、左手のみで点字を読んでいる ・触読スピードは1分間に平均160文字程度（小学4年3学期） ・かな文字だけでなく、数符を使用した文字（数字）の読み替えが可能 ・書字練習ではパソコンを使用した点字入力で、左右半マスずつの入力のため時間を要するが意欲的に取り組むことができる
他教科の学習状況	<ul style="list-style-type: none"> ・下学年適用の教育課程に属すが、教科によってはばらつきがある ・算数は小学1～2年の内容を学習している
音楽的な表現に関する状況	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽発表会では「もみじ」の2部合唱に意欲的に取り組んだ ・ソプラノリコーダーでは、左手を使ったソラシドレの演奏が可能である ・授業開始当初は楽譜や音符の知識や概念が全くない ・教師が範唱する階名唱を模倣し歌うことができる。2小節程度の短いフレーズであれば、音程感をもって歌唱することができる ・教師が範奏するリズムを模倣して「ウン」や「タン」などのリズムを言いながら拍を感じてリズム打ちをすることができる

(2) 音楽に関する実態について

リズム感や音程感等音楽的な感性について実態を把握するため、音楽表現スキル評価表を作成した(表3)。リズム打ちでは4分音符と4分休符、8分音符と8分休符、2分音符と2分休符などの様々な音符や休符が混ざった2小節程度のリズム模倣ができた。3拍子や4拍子も拍を感じて表現したり、3連符も同様に模倣し表現することができた。階名唱ではドレミファソの音を使った順次進行による上行形や下行形、ドミソ等の3度音程やドソ等の5度の音程も音程感を持って模倣することができた。また、ソラシドの音を使った階名唱やピアノで弾いたメロディを聴きとり階名で歌うことも可能であった。これらの実態により音楽的感性においても点字楽譜を学ぶレディネスが整っていることが推測できた。

表3 音楽表現スキル評価表

		実施日 H24年 4月25日		
		◎よくなる ○できる △あまりできない		
No.	領域	内容	評価項目	評価
1	概念	楽譜	・「楽譜」という言葉についてある程度説明できる。(生徒の言葉を空欄に記入) 【わからない】	△
2	概念		・音符や休符の名称、楽譜に使われる用語等を言うことができる。 【わからない】	△
3	概念	音符と休符	・音符と休符がわかる。(音符は音が出ている状態、休符は出していない状態。)	△
4	概念	四分音符	・四分音符について(名称、タン、1拍など何でもよい)説明することができる。	△
5	模倣表現		・教師が叩くリズム(四分音符)が叩ける。…拍を感じる◎感じない△ 	◎
6	模倣表現		・1～2小節程度の教師が叩く(タンタンなどの)四分音符のリズムをはっきり言いながら叩くことができる。…拍を感じる◎感じない△ 	◎
		・4/4拍子2小節のリズムで、四分音符の中に四分休符が1つ混ざったリズム		

5 指導の実際

(1) 第1回検証授業について

- ① 題材名：点字楽譜
- ② 題材目標

ア 点字楽譜の基礎的事項である音符や休符・階名等を理解し、平易なリズム譜及び旋律譜を読み表現することで情報を適切に入手し対応できるようにし、読譜の困難さを改善・克服しようとする意欲を育てる。

イ 点字楽譜と音楽表現との関連性を学習し、これらの感覚を総合的に活用することで、楽譜の概念形成を培う。

③ 授業仮説

点字楽譜の基礎的事項である音符や休符・階名等を理解し、平易なリズム譜及び旋律譜の読み方や音楽的な表現方法を学ぶことで、自らリズム譜を読んだり階名唱で表現することができるようになるであろう。

④ 指導計画 (45分授業：本時4/12時間)

次	指導目標	指導内容
第1次 (1時間)	①学習の目的や内容を理解する	・顔合わせ ・オリエンテーション ・音楽表現スキル評価表チェック
第2次 (10時間) 本時3/10 ・楽譜に関する 音符や記号と 点字楽譜の表 記についての 説明	①音符や休符について理解し読譜できるようにする	・4分音符の名前と長さ ・リズムあそび ・音あてクイズ ・4/4拍子について ・4分音符や4分休符の概要と表記・リズム譜の読みと表現 ・4分音符の「ドレ」の表記とメロディ譜の読譜、表現
	②かな文字の読み替えに慣れる	・2拍子と3拍子の概要と表記について ・4分音符の「ミ」の表記 ・4分音符の「ドレミ」と4分休符を使った旋律譜の読譜と表現 (第1回検証授業：本時)
	③楽譜で使われる記号について理解する	・4分音符「ファソラシ」の表記及び読譜と表現 ・2分音符の表記及び読譜と表現
	④読譜したことを階名唱や器楽演奏で表現することができる	・8分音符の表記及び読譜と表現 ・付点音符の表記及び読譜と表現 ・音列記号について
第3次 (1時間)	読譜したことを授業で活かすことができる	音楽の授業における器楽指導 (第2回検証授業)

⑤ 授業の展開

本時のねらいは、①点字を音符へと読み替えと②拍子記号の理解である。導入で「リズム遊び」や「音当てクイズ」と称して、教師の叩くリズムや階名唱を模倣させるなど、楽しい雰囲気作りを心がけた。次にリズム打ちをしながら発する「タン」という音符が4分音符という名称であり、長さが1拍となること、通常の点字では「け」と読むが音符として読む場合は「4分音符のミ」と読み替えることの確認をした。この読み替えについては、本時以前の授業で「すさ」の文字を「4分音符のドレ」と読み替えることなどを何度も確認しているため、音の高さが変化しても対応できるようになっていた(図10)。さらに、本時で提示した課題についても十分に対応でき音楽的表現については音符の長さや階名の読みを理解していたので、音程感を持って階名唱で表現した。拍子記号の読みについては理解が早く4分の2拍子や4分の3拍子についても応用できたが、音符カードを使った拍子記号の意味の理解には至らなかった。カードを使ったリズム譜の読譜や表現については喜んで取り組んでいたが、楽譜を通して意味の理解を促すのではなく、様々な楽曲を鑑賞したり演奏する経験を通して感覚的に感じ取らせるような配慮が必要であった。

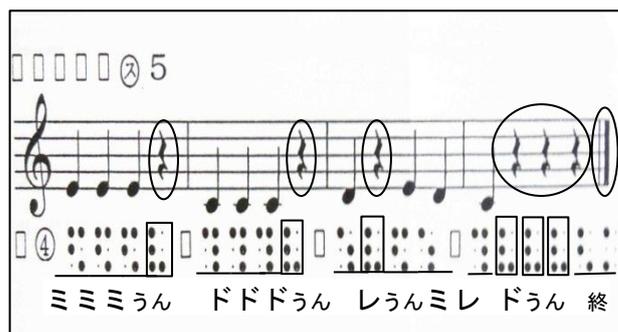


図10 演習問題譜例

⑥ 第1回検証授業の結果と考察

点字楽譜の指導を行うまで楽譜や音符の概念が全くなかった本児であるが、検証授業では音符の名称が4分音符であること、長さが1拍であり、点字の「け」が音符では「ミ」となることやリズムの読み方も「タン」と表現することから、楽譜の知識が理解されていることが確認できた。また、「小節線」「4分休符」「終止線」などの楽譜記号の読み替えもスムーズに行われ、これまでの学習が定着していることがわかった。さらに、教師の支援がなくても提示された楽譜を階名唱やピアノ演奏により音楽的に表現できた。拍子記号は、1小節内の拍数等による説明について理解することはできなかったが、分数の読みはできるようになった。これらのことから、本題材の仮説である対象児の読譜理解と音楽的な表現への移行は有効であると考えられる(表4)。

表4 第1回検証授業のまとめ

目 標	活 動 の 様 子	評 価
①「4分音符のミ」の読み替えが分かり音楽的に表現できる	・かな文字では「け」と表記されるが読譜の際に「4分音符のミ」と読み替えができ、音程を感じて表現することができた	音符の読み替えが理解できた
②これまで学習した音符や休符を使用した平易な楽譜の読譜と表現ができる	・4分音符のドレミ（すさけ）と4分休符（ひ）の表記が混ざった平易な楽譜の読譜ができ、音程を感じて表現ができた ・楽譜で使用される「小節線」「終止線」などの読み替えができた	楽譜の知識を理解し音楽的に表現できた
③2拍子と3拍子の表記が理解できる	・本時では分数の点字表記の読み替えができなかったが、その後の授業で読み替えができるようになり、2/4拍子、3/4拍子、4/4拍子の拍子記号の読みができるようになった	様々な拍子記号が読めた

(2) 第2回検証授業

① 題材名：重なり合う音の響きを楽しもう

② 題材の目標

ア 旋律部と副旋律部それぞれの楽譜を読み取り階名唱することで、各声部の音の流れがわかりリコーダー演奏につなげることができる。

イ 工夫して練習することでよりよい演奏に繋げることができる。

ウ 拍の流れにのって互いに重なり合う音の響きの美しさを感じ取りながら合奏する。

③ 教材観

教材名「あの雲のように」作詞 芙龍明子 作曲者不明・編曲 飯沼信義 ト長調、4分の3拍子のゆったりとした曲で、歌唱や器楽により演奏を楽しむことができる。ト長調の曲であるが派生音（ファ#）の音が使われていないので、ハ長調の楽譜と同様に読譜し演奏することが可能である。本教材は、ソプラノリコーダーで演奏すると左手のトーンホールの押さえであるソラシドレが主な指使いとなるので、右手が麻痺のため演奏が制限される対象児にも十分対応でき、音の響きが明瞭で演奏しやすい曲となっている。2重奏により重なり合う音の響きを感じ取って演奏できるよう指導していきたい。

④ 授業仮説

ア 旋律部と副旋律部それぞれの楽譜を読み取りリコーダー演奏に繋げることで、読譜から器楽演奏へと活動を発展することができであろう。

イ リコーダー演奏を通して良いところや改善したいところなど自分の考えや感じたことを話し合い、工夫して練習することで音楽活動に主体的に取り組もうとする態度を育てることができであろう。

⑤ 本題材と研究テーマとの関わり

本題材は、「あの雲のように」のソプラノリコーダー2重奏により重なり合う音の響きを感じ取ることがねらいである。本研究との関わりとして、リコーダーの楽譜を読み取り、リコーダーによる演奏表現へとつなげることで、読譜学習の有効性を示し主体的な音楽活動へとつなげていきたいと考えている。ここでいう主体的な音楽的活動とは、「自ら意欲的に音楽活動に取り組もうとする態度」であり、「自ら考えて音楽活動に関わろうとする」児童像である。音楽活動とは、音楽科授業における歌唱・器楽による表現や鑑賞、創作などが主たる内容となっている。器楽指導において重要な階名指導は、楽譜の知識がない児童に対して、これまで教師の口伝えや範唱による模倣が一般的であった。このような指導は、演奏ができあがった時点では問題ないように思われるが、自分で楽譜を読み解く力がないため常に第三者による階名の確認作業をしなければ正確に演奏することは難しい。また、全盲児と弱視児とで楽譜指導において差が生じることとなり、この点においても、読譜能力の差異が音楽活動において児童生徒の主体性と大きく関わると捉えることができる。よって読譜したことを表現へと繋げていく過程で得る思索する機会や、楽曲を特徴づけている要素について学習する機会を大事にしていきたい。楽譜に表記されていることを楽器で表現しようと思ったり、音質の特性や音楽的な表現を創造する行為は、授業における音楽活動だけでなく卒業後の余暇活動としての音楽的な活動においても深く関係するものと考えられる。

⑥ 指導計画 (45分授業：本時2 / 3時間)

次 (配時)	指導目標	学習内容及び学習活動
第1次 (1時間)	①曲の雰囲気を感じ取って歌ったり階名唱をする ②姿勢や指使い、タンギングに気を付けて演奏する	①曲の雰囲気を感じ取る ・歌唱による旋律部と副旋律部の把握 ・曲の特徴について考え拍を感じて歌う ②演奏に必要な要素を理解し練習する ・旋律と副旋律の楽譜の読みと階名唱による練習 ・リコーダーによる運指練習
第2次 (2時間) 本時1 / 2	①練習の仕方を考え友達と話し合ったり工夫して練習し、よりよい演奏に繋げることができる ②練習の成果を発表する	①工夫して練習する ・工夫して練習する箇所について考えパート練習する ②2重奏の練習 ・自分で考えたり友達の意見を聞きながら2重奏の練習法を工夫する
	①拍を感じて演奏する ②重なり合う音の響きを感じながら練習する ③練習の成果を発表する	①3拍子の拍を感じて演奏する ②パートを交代するなど相手の音を感じ取って練習する ③重なり合う音の響きを感じながら練習する

⑦ 授業の展開

授業は、小学6年生弱視児童と本児2名の複式による指導形態をとっている。検証授業では、パート譜が正しく読めていることを確認した後で、旋律部と副旋律部の階名唱による曲想の把握、運指練習へと展開した。読譜や階名唱、運指練習では課題にスムーズに取り組む姿勢が見られ、パート決めや互いの練習方法についても本児と6年生児童との対話により進行した。本児自ら第2パートを演奏したいと発言し、読譜からリコーダーによる表現では教師の支援がなくともスムーズに移行することができた。2重奏になると最初の4小節の休符がカウントできず、旋律パートと3度音程で重なる箇所でもタイミング良く入れなかったため教師の助言を要した。要領を得ると旋律パートの音に合わせて1人で練習できるようになり、徐々に2つの音が重なるようになった。何度か試行錯誤を繰り返しているうちに、授業の最後の場面になって初めて曲の最初から最後まで通して2つの音が重なりあうようになった。この間、教師の支援や声かけがなくとも自ら思考し黙々と練習する対象児の姿勢が見られ、授業の終わりには「二人の音が合わさったところがすごいと思った。」と感想を発表した。

⑧ 第2回検証授業の結果と考察

旋律や副旋律の読譜については、4分音符、2分音符、付点2分音符などの様々な種類の音符がソ～レの音域で使われており、さらに全休符、4分休符、タイなどが使われている。このように教科書中の楽譜に理解を示し、楽譜が正確に読譜できているかについて教師と共に確認することができた。読譜からリコーダーによるパート練習では、弱視児との話し合いの中で自分の意見を述べ、児童の演奏に合わせて本児自ら音を重ね合わせて曲を完成させようと黙々と練習に取り組む姿勢が見られるなど、主体的に学習に参加できたと考えられる。特に二つの音が重なり合う場面での「二人の音が合わさったところがすごいと思った。」という感想は、第1パートを演奏する児童の活動の様子が見えない全盲児が、旋律の音だけを頼りに自らの演奏を重ね合わせることができたという喜びと、重なり合った二つの音がより豊かな響きを持った音楽表現につながったことへの感動の気持ちが表れている。本授業の仮説である読譜からリコーダーへの表現が本児自らの力で成し得たことや、試行錯誤を重ねながらもあきらめることなく集中して取り組み最後までやり通したことで味わう達成感により、授業のねらいや仮説は検証できたと考える(表5)。

表5 第2回検証授業のまとめ

目 標	活 動 の 様 子	評 価
①リコーダーのパート譜を読譜し演奏表現ができる	・4分音符、2分音符、付点2分音符などの様々な種類の音符がソラシドレの音域で使われており、さらに全休符、4分休符、タイなどが含まれる楽譜の読譜と階名唱やリコーダー演奏を一人でできた	様々な楽譜の記号の理解と音楽表現へと発展できた
②自分の考えや感じたことを発表する	・パートを決める6年生との話し合いで、副旋律である2パートを担当したいと自ら意見を述べた	自ら意見を述べることができた
③工夫して練習することで音楽活動に主体的に取り組む	・旋律パートの音に合わせて練習に取り組む。試行錯誤を繰り返していくうちに、最後の場面で2つの音が重なりあうようになった。この間、教師の支援や声かけがなくとも、自ら思考し黙々と練習する対象児の姿勢が見られ、最後に「上手にできた」と感想を発表した	課題達成のため主体的に学習に参加できた

(3) 研究仮説の検証について

① 点字楽譜の読譜力と音楽的表現への関係性の理解について

点字楽譜の指導では、文字から音符への読み替えに慣れさせ、徐々に音域や音符の種類を増やしていき楽譜を読み解く力をつけることを目標とした。読譜が正しくできていることを確認した後、階名唱やピアノによる表現を教師と共に行い、音符と実音が一致できるようにした。これにより、「きらきら星」「七夕」「喜びの歌」など、知っている曲については曲名を言い当てることができ、知らない曲でも音楽による表現ができるようになった。途中、4分音符から2分音符へと音符の種類を増やす際に2つの音符の判別が難しく迷うことがあったが、2分音符の長さは2拍であることやリズムは「ターアー」で「つ」と表記すること、「2分音符のド」は「ドーオー」と読ませること等を反復練習することで理解が深まり、4分音符と2分音符の識別が可能となった。また、休符や小節線、終止線、拍子記号やタイなども理解できた。このことから、楽譜に関する知識のなかった本児が、研究を進めていく中で、音符や記号を理解し音楽として表現できるように変容が見られたことがわかる。

② 音楽活動への主体的な取り組みについて

これまで、教師による階名の口伝えで音の流れを認識し器楽演奏へと移行していたが、読譜ができることにより、教師の支援がなくても自らの力で演奏表現が可能となった。さらに、2重奏に向けて自ら取り組もうとする主体的な態度が見られ、演奏に繋げることで達成感が持てるようになり研究の有効性が示された。様々な曲を読譜して表現へつなげられることに自信がつくようになると、本校卒業生で歌手として演奏活動やCD制作などで活躍するあこがれの先輩と自分の将来像を重ね「T兄ちゃんのようにになりたい」と具体的な目標として夢を持つようになり、意欲的に練習に取り組む姿が見られた。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 点字から点字楽譜への読み替えができるようになり、楽譜を構成する基礎的な記号や音符や休符について理解できた。
- (2) 読譜から歌唱やリコーダー等の器楽演奏により音楽的に表現することが可能となることで、読譜と音楽表現とのつながりについて理解できた。
- (3) 読譜により旋律の流れを把握したり、リコーダー演奏につなげ主体的に授業に参加することで、読譜の有効性が示された。

2 課題

- (1) 本児の学習環境の整備と指導の継続について連携を図る。
- (2) 点字楽譜導入期における指導についてさらに研究を深める。
- (3) 点字楽譜導入期における指導について研修会等で周知を図る。

<主な参考文献>

- 点字学習を支援する会・点字表記支援グループ 2008 『点訳便利帳 2008年版』
鳥山由子 『視覚障害指導法の理論と実際ー特別支援教育における視覚障害教育の専門性ー』 ジェームス教育新社
呉 暁 1993 『ソルフェージュからピアノへー4・5歳児のピアノの指導ー』 音楽之友社